

○異世界耳かき

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

※セリフ前数字は立ち位置番号となります。（バイノーラル指示表を参考）

※数字が【ー】で続く場合は初めの番号から次の番号へ移動しながらセリフを読みます。

※シナリオ中に魔法が登場しますが効果音の有無や音自体はお任せします。

シーン 1

歩く音

6 「（囁き）こんにちは」

7 「ふふ、こつちよ？」

1 「ごめんなさい、急に声かけちゃって。今日も来てくれたんだね、嬉しい」

1 「まさか、もうお店の前まで来てくれるとは思っていなかったけど、今日は少し早いね」

1 「さつきまでね、そこをお散歩してたの」

1 「ほらっ、今日すごくいい天気じゃない？」

1 「お散歩にはちょうどいいかなーって」

1 「あ、そうだ。まだ時間に余裕があるから、今日はまず一緒にお散歩でもしない？」

1 「そ、森の空気を感じながら。お弁当なんかは無いけど、お菓子はあるから」

1 「それでミニピクニック・・・どうかな？」

1 「大丈夫、お散歩する時間はコースに含めないから」

1 「キミだから特別に、ね？」

40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21

1 「ふふつ、決定。お菓子持ってくるから少し待ってて」

扉を開けてお店にお菓子を取りに行く

少しの時間の後、奥からお菓子をもつて帰ってくる

9
1 「お待たせ。じゃあ行きましょうか」

シーン2

森の中で散歩し

3 「ここらへんでいいかなー、少し休憩しましょう」

3 「（背伸びして）んーっ。ああ、本当に良い天気ね」

3 「空気も一段と美味しい感じがしない？少し肌寒くはなってきたけれど」

3 「あ、大丈夫よ上着は。ふふつ、ありがと。優しいのね」

3 「まあ、いつも優しいのだけれど」

3 「さあさあ、お菓子でも食べながらのんびりしましょう」

3 「好きな物取っていいからね？」

下に簡単な布を引きお菓子を広げる

3 「ん？遠慮なさらず。どうぞ？」

3 「ちなみに、私のお勧めはー・・・これかな、はむっ」

3 「もぐもぐ、んーっ。おいひ。ごくん。あ、そうそう」

「前に言ってた・・・えと、元の世界への帰り方はわかったの？」

3 「私もね、キミから聞いてから色々考えてみたのだけれど」

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
<p>「どうすればいいのかはやっぱ見当もつかなくて・・・ごめんなさい」</p> <p>「私も初めて聞いた時はなんのことだかわからなくて」</p> <p>「あの時は混乱して恥ずかしい姿を見せちゃったわね」</p> <p>「森の中、見たこともない格好でキミが歩いていて、凄く不安そうな顔で」</p> <p>「あんな顔を見てしまったら声を掛けずにいらなかったの」</p> <p>「少し怖かったけれど、でも。あの時声を掛けたおかげでキミと出会えて」</p> <p>「今ではこんなに仲良くなっちゃったわね」</p> <p>「ふふつ、そんな少しも迷惑なんかじゃないの。むしろその反対」</p> <p>「素敵な偶然が、私たちをめぐり合わせてくれた・・・そう考えると、とてもドキドキして」</p> <p>「今こうやってキミとお話している時間は奇跡がくれた素敵な事なんじゃないかって」</p> <p>「キミも、そうは思わない？」</p> <p>「それとも、精霊様のお導きだったりして」</p> <p>「そう、精霊様。キミの世界にはいないのよね」</p> <p>「出会ったばかりの頃は簡単にしか説明しなかったけど、この世界には3大精霊と言われる存在がいるの」</p> <p>「秩序・愛・そして癒しを司る精霊様^{ちつじょ}」</p> <p>「その3大精霊が人々の争いに終止符を打つため、手を取り合い誕生させたのがこの世界と言われているの」</p> <p>「おとぎ話だから、どこまで本当かはわからないのだけれど」</p> <p>「でも、そのおかげかキミの言っていた様な悪い人はここにはいない」</p> <p>「私が世間知らずなだけかも知れないけど、少なくとも今まであったことはないかな」</p> <p>「皆が幸せに、笑顔で過ごせる世界。ここはそういうところ」</p>																			

61 「そんな精霊様が、これもおとぎ話だけれど、不思議な力で偶然という奇跡を起こすことがあるらしいの」
62 「その偶然は必ず素敵な物となる」
63 「本当かな？つて疑っちゃうけど。でも、この世界を作った方々ならありえるのかもつて」
64 「それに、そう信じてたほうが素敵でしょ？」
65 「キミの世界にいるつていう神様？という方^{かた}に近い存在なのかも」
66 「ーあ、精霊様で思い出した。魔法は使えるようになった？」
67 「んん、やっぱり難しいのね。別の世界の人でも適正とかあるのかなと思ったのだけれど」
68 「生活魔法だけでも覚えていると、これからの生活とても楽になると思ったのに」
69 「ん？私は癒し属性系統の魔法と簡単な物質転移しか使えないの」
70 「あー、そつか。まだ私の魔法について説明したことなかったつけ」
71 「それなりに会っているのに、一度も見せたことなかったものね」
72 「結構お店でもバンバン使っているのだけれど、キミつてばいつもすぐ私の膝枕でスヤアってしているもの」
73 「見てみたい？んー、といつても、そんな見ごたえのあるものではないのだけれど」
74 「そうねー、たとえば」
75 「【おいで】」
76 「というふうに、頭に思い浮かべた耳かきを手元に召喚できたり」
77 「【戻つて】」
78 「という風に唱えたり思い浮かべると元あった場所に帰つてつたり。これが物質転移」
79 「なんでもかんでもは私では呼び出せないけど、簡単な物なら自由に出来るの」
80 「キミを膝枕しながらあれもこれも出来てたのはこれのおかげ」

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81

3 「ちなみに」

7 「私自信もこうやって瞬間移動できたりします」

7 「さすがに私くらいサイズになると、このぐらいの距離が限界だから使い道はあまり無いのだけどね」

7 「ちよつと脅かしたりお茶目な事が出来ちゃうって感じかしら、なんて」

7 「癒しの魔法は・・・これはお店で実践したほうがわかりやすいかもしれないわね」

7 「ーさてと、ちょうど良いお時間にもなったし。お店のほうに戻りましょうか」

7 「ん？物質転移でって、もおー、楽しようとしないの。それに出来ないんだってば」

7 「（囁き）後でたつぷり癒してあげるから」

7 「今は頑張って歩こ？ね？」

7 「ふふつ、良い子♪」

シーン 3

お店に戻ってきた2人が部屋に入り

2 「はい、お散歩お疲れさまでした。今お茶を用意するので座ってお待ちください」

2 地点からお茶淹れる音

2 「肌寒かったですから、温かいお茶を淹れますね」

2 「温かいおしぼりも、はい、どうぞ」

2 「ん？どうかされましたか？」

2 「あ、はい。敬語ですけど・・・先ほどの楽な話し方のほうが良かったですか？」

120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101

2 「ふふつ、ごめんなさい。確かにいつもはこっちの話し方だけど、さっきまでキミとプライベートで話

てたから、メリハリつけるために敬語にしちゃった」

2 「だって、なんか格好がつかないじゃない？ずっと楽に話していると」

2 「キミは大事な大事な常連様だから、出来るお姉さん感を見せておこうかなーなんて」

2 「まあ、今更なのだけど・・・はい、どうぞ。少し熱いからお口火傷しないようにね」

2 「それとも、フーフーしてあげたほうが良かったかな？」

2 「あらっ、意外にも素直な甘えん坊さん」

2 「ふふつ、しょうがない子ね。フー・・・フー・・・フー・・・」

2 「はい、どうぞ。甘えん坊さんなお口でも飲めるようにしてあげたよ」

お茶を飲む

2 「どう？美味しい？」

2 「今日の茶葉はね？いつもより奮発してるんだよ？」

2 「この渋みがお口に合えばいいのだけれど」

2 「ふふつ、大丈夫そう？良かった」

2 「それじゃ、今日もいつもの感じでやっていって良いかしら？」

2 「りょーかいです」

転移で背後に移動する

5 「んしょつと、肩のマッサージからやっていくね」

肩揉み開始

5 「えへへ、ちよつとイタズラに驚かせてみようと思つて背後に転移しちゃいました」

〔40 〔39 〔38 〔37 〔36 〔35 〔34 〔33 〔32 〔31 〔30 〔29 〔28 〔27 〔26 〔25 〔24 〔23 〔22 〔21

5 「いつもはこんなことあまりやらないけど、森での反応がよかったからつい」

5 「キミってば、驚いた顔が可愛いんだもの」

5 「それに、他の人だとそこまで反応しないから」

5 「うん、だってこっちの人達は転移とかめずらしくないから」

5 「少しはビックリするかもしれないけど、そこまでの反応はしないのよ」

5 「だから改めて、ああこの人は異世界から来たんだなーって思うかな」

5 「（少し焦って）あつ、えと。私たちの知らない、違う世界から来たんだなーって」

5 「共通点があるとしたらー、基本的に道具は見知ったものだって言ってたわよね」

5 「例えばお菓子とか、服の基本的な素材なんかも一緒のようだし」

5 「案外、私たちのこっちの世界とキミの世界は似ているのかもしれない」

5 「こっちの世界にはね？昔からの言い伝えのような物があるのだけれど」

5 「世界っていうのは、世界と世界が一枚の壁のようなものを隔てて存在してるって言われてて」

5 「ある時、それぞれの世界でとある出来事が起きるとその壁を簡単に超えてしまつて、他の世界に迷い込んでしまうことがあるって」

5 「その結果、人物と一緒に違う世界の文化や物が紛れ込んでしまうそうよ？」

5 「でもそれって、違う世界に住む者同士でも、もしかしたら知らぬ間に同じものを好きになったり、同じものを食べていたり」

5 「なんかとてもロマンチックなお話だなーなんて、初めて知ったときは思っていたもの」

5 「んーそうね、この話は私がまだ小さなときに学校で教えてもらったかな」

5 「そお、学校。あるのよ？こっちにも」

160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141

5 「むしろ無いとここまで流暢^{りゅうちやう}にお話したりするのは難しいかな」

5 「でも、昔は無かったそうで、それこそ当時は大変だったそうよ？」

5 「人間やエルフやドワーフ。色々な種族が助け合うこの世界で言語^{げんご}が無かったときは身振り手振りで伝えていたそうだから」

5 「詳しいことはわからないのだけれど、ある日とある町に現れた一風変わった賢者様が学校を作ったり色々な物を分け与えてくれたみたいで」

5 「そして、文明は進んだって」

5 「ちなみに、その賢者様は今でもご健在で、今もどこかにはいるそうよ？」

5 「私が知ってる知識はそれくらい」

5 「ほら、私ってばこの森からあまり出ないから」

5 「キミに色々教えて偉そうに見えるかもしれないけど、実は私自身も結構な世間知らずだったりするの」

5 「子供の頃までは王都の学生寮にいて、学校卒業とともにすぐこのお店を継いでいるから」

5 「そお、元々このお店はお父さんとお母さんのお店だったの」

5 「あ、だけどね？一応言っておくと両親ともまだ元気よ？」

5 「私に癒し属性への適性があつたから、この店は任せたって夫婦水入らずで長旅に出かけちゃって」

5 「2人とも今頃、忙しくて謳歌^{おうか}出来なかった青春を取り戻してるんじゃないかしら」

5 「2人が出て行ってしまう前に、もう少し甘えていたかっただなんてふとした時に思うの」

5 「・・・えと、だから、このお店にずっと私はいるし、世界を知れるのはここに来るキミのお話を聞く範囲^{はんい}だけ」

5 「そんな私が世間知らずにならないようにするにはもつともつと、キミからお話を聞かせてもらわないと

いけないから」

肩揉み終わり

「（囁き）外の事、たくさん聞かせてね？」

「ふふつ、さ、肩の次はお耳のマッサージでもしましょうか」

「いつもと同じ感じでよかった？」

「ごめんね、ちよつと触らせてもらうね」

耳の触診をする

「んー・・・あらあら、結構疲れ気味じゃない？」

「気の流れが詰まってる感じ」

「それくらいわかるよ、癒しの魔法使いであり属性持ちですから」

「お耳癒しながらお話しするね」

両耳のマッサージ開始

「私みたいな癒し属性持ちっていうのは、相手の体に流れる魔力とかの流れを感じることが出来るの」

「でも、キミみたいに魔力を持っていないタイプの人もいるんだけど、そういう人には生命力？のようなものが代わりに見えて」

「それを皆は気って呼んでる」

「気っていうのは魔力とほぼ同じ流れ方をしていてね」

「疲れが溜まっていたりする部分だと流れが悪くなるの」

「その流れを良くするには直接その部位に癒しの魔法を流し込んであげる必要があるのだけれど」

「それを一番効率よくするのがマッサージをしてあげながらだったり、癒し付与した道具を使ったりする

のが効率的って言われているの」

「だからこうやって、よいしょ・・・よいしょってキミの耳がフニャフニャになるまで魔法を流しながらマッサージしてあげる必要があるんだよー」

「実際魔法が使われているかって感覚は掴みづらいでしょ？なんか疲れがいつもよりも取れるなーみたいな」
「だから、癒しの魔法って証明が難しいのよね。魅せるための物じゃないから」

「さてさて、柔らかくなった所からはたくさん魔法を入れやすいから、いっぱいほぐさなきゃね」
「でも、キミってはどうしていつも来てくれるのに疲れをため込んできちゃうんだろ」

「私のマッサージがたりないのかな？」

「え？あー・・・キミに紹介してあげたお仕事？」

「確かにこつちで生活が出来るようにってお仕事を紹介してあげたけど」

「そつか、すつごく頑張ってるんだね」

「凄いな・・・私だったらもし違う世界なんかにいつちゃって」

「右も左もわからない時に、いくら生きていく為に必要だからって割り切ってお仕事できない」

「それなのにキミはこんなに疲れが溜まるくらい頑張ってる」

「え？今ではこつちの生活に慣れて充実してるからって、やりがいを感じるのとは良いことだけど無理はしちゃだめよ？」

「もー、これは本格的に癒してあげなきゃいけないわね」

「と言っても、今まで手を抜いていたわけじゃないからね？」

「より一層、私も頑張らなくちゃいけないなって」

「ほらっ、お耳のここなんか気の流れを感じなくなってるのがわかる」

220 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201

5 「相当なことなのよ？これは」

5 「もしかしたら、これからは一日に2回は通わないとほぐしきれないかもね・・・なんて」

5 「ふふつ、真に受けなくて良いの。それぐらいこつてるから気を付けてねってことだから」

5 「そういえば、私が紹介したお仕事先にもお見えになるっていう仙人さんにはもう会ってる？」

5 「あ、まだなんだ・・・なかなかご多忙な方で有名だからいつか会えたらラッキーね」

5 「仙人さんはね、もう結構なお年のおばあちゃんだけど、癒しのスペシャリストなの」

5 「世界的に人気があつて、色々なお仕事をめぐっては、そこで働く人たちを癒して去っていくの」

5 「何度かこのお店にも来てくださった事があつて」

5 「実はお父さん達とはお知り合いで、密かに癒しについての先生をしてくださってるの」

5 「この前も、貴方はまだまだ癒しの道を歩めておりませんぞおつて」

5 「色々ご指導頂いて」

5 「朗らかで、温かい雰囲気の方」

5 「あ、それでその仙人さんがね、前に言ってた事なんだけど」

5 「癒しは心と身体そのどちらをも癒すのが大切だけれども」

5 「何より一番大切なのは、癒しを与えている時の一緒にいる時間なんだって」

5 「自分との時間が、相手にとって癒しの時間と感じてもらえる事」

5 「それができて、一人前なんだてことを教えて頂いたの」

5 「私はまだそこまで出来ているか不安だけど」

5 「キミの凝り固まったお耳が柔らかくなって」

5 「気持ちよさそうな顔をしてもらえていると、一人前になった風な感じは出るかしら？」

240 239 238 237 236 235 234 233 232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222 221

5 「ふふっ、いっぱいマッサージしたからお耳がもうフニャフニャになっちゃった」

両耳のマッサージ終わり

5 「ちよつと頑張りすぎちゃったかしら？ふふ」

5 「それじゃあ、キミの大好きなお耳掃除を始めましょう」

6 「いつも通り、お膝に頭をコロンっしてくれる？」

3 「はい、よくできました」

3 「耳かきさん、おいで」

手に現れる耳かき

3 「ほら、いつもこうやってるのよ？」

3 「今日は珍しく起きてたね、私がずっと喋ってたせいもあるだろうけど」

3 「もし、本当に寝たかったら遠慮なく言ってね？」

3 「疲れてるだろうし、ここではリラックスしていつてほしいから」

3 「あら、私とお話をしてほしいの？あらあら、眠れなくってリラックス出来なくっても、もう責任取れま
せんからね？」

3 「じゃあ早速始めていきましようか、左耳さん、お邪魔します」

左耳、耳かき開始

3 「と言っても、いつも通り綺麗なお耳ですけど」

3 「毎回お耳掃除しているものねー」

3 「でも、慣れてくれたみたいで安心する、ちゃんとお耳の穴が見れると」

3 「初めてこのお店を利用してくれた時なんか、私のお膝の上で緊張していてガチガチだったものね」

260 259 258 257 256 255 254 253 252 251 250 249 248 247 246 245 244 243 242 241

3 「小刻みに震えるもだから、あの時はお耳も正確に見えないし耳かきをいれても狙いが定まらないし、とても怖かったわ」

3 「あら、どうしたの？お顔赤くして、久々に初心を思い出してしまったかしら」

3 「ごめんんさい、意地悪だったわね」

3 「え？仕方がなかった？」

3 「そうねー、あまりこういういった経験が無いって言ってたものねー」

3 「それが今では、あつという間に寝てしまうほど安らいでもらって」

3 「これほど癒しを提供する者として嬉しいことはないわ」

3 「癒しの魔法をかけていたっていうのも原因でしょうけど」

3 「お耳のマッサージの時に魔法を流し込みながらマッサージをしてるって言ったでしょ？癒し効果で気持ちいいから普段よりも本当は眠たくなるのよ」

3 「さっきのマッサージの時はいつもよりは抑えめで流してたのもあるけど、やっぱりお話をずっとしてたから眠たさよりも目が覚めてしまったのかも」

3 「今まではあそこまで話していなかったり、そもそも静かにしていたから、すぐに眠ってしまっていたってのもあるかもしれないわね」

3 「ん？今は掛けてないわよ？」

3 「んー、今はね、そうねー・・・」

3 「なんとなく、こうした方が良くと思ったの」

3 「リラックスしてもらわないといけないから、本当はいつも通りにして眠ってもらって」

3 「心も身体も最上級にリラックスしてもらおう・・・そうしなければいけないのだけれど」

280 279 278 277 276 275 274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261

3 「なんでかしらね、今日はキミとこうやってお話していたいなって思ってしまったの」
3 「ごめんなさい、ワガママ言つて。もしもいつも通りにスツと眠りたい時は言つてね」
3 「でも、ワガママを許してもらえるのであれば、今日はこうやってお話していたいな」
3 「ふふつ、ありがとう」
3 「こういうのってたまにあるの」
3 「突然ふいに、こうしたほうが良いんじゃないかって」
3 「きつと、精霊様のご助言で導いてくださっているのかもしれないわね」
3 「それぐらい、ただ思うのじゃなくて、感じるの」
3 「……ねえ、話変わるのだけど変なこと聞いても良い？」
3 「私への初期の頃の印象ってどうだったのかな？」
3 「いえ、初めてというよりも、少しお話した時かしら」
3 「森でも話した通り、キミが不安そうな顔をしてた時は怖がられてるのかなって思ったの」
3 「だってそうじゃない？キミにとってはなにもかも見慣れぬ世界で、不安で。そこで初めて会った人」
3 「信用していいのか、とか。凄く思われてるのかなって」
3 「でも、少し話していたらキミの表情が和らいでいって、あの日、ここで食事したの覚えてる？」
3 「あら、覚えてないのね。まあ、あの状況じゃあ無理も無いけれど」
3 「私が出した料理を疑いもせず食べてくれたの」
3 「あの時は、嬉しかったな」
3 「キミにとっては何気ない行動だったかもしれないけど」
3 「とても心がポカポカして」

300 299 298 297 296 295 294 293 292 291 290 289 288 287 286 285 284 283 282 281

3 「それがキツカケでお世話焼きすぎちゃって」

3 「迷惑じゃなかったかしらってたまに反省しているの」

3 「だから、どうかなって」

3 「印象悪かったら通ってない？」

3 「それはそうかもしれないけど、キミつてば優しいから気を使わせてしまってるかもって」

3 「純粹に來たいから・・・そう」

3 「（独り言のように）なら、期待していいのかしら・・・でも」

3 「いえ、ごめんなさい。なんでもないの」

3 「そう言ってもらえて嬉しかったってだけ」

3 「はあー良かった。胸のモヤモヤが取れた」

3 「このままだったら、私のほうこそ癒しが必要だったかもしれないわね」

3 「あ、そうそう。モヤモヤが取れてふと思いだしたのだけれど、王都にね変わったお菓子が出来たそうよ？」

3 「なんて言ったかしら・・・わたがし？とかいうフワフワな雲みたいな甘味だそうで」

3 「ん？あら、知ってるのね。もう食べてたりするの？」

3 「お恥ずかしながら、甘いものに目がなくて・・・あ、今知ってるよって顔したでしょ」

3 「前にね、お客様から聞いてから気になってたのよ」

3 「・・・元の世界に？あら、そんな偶然があるのね」

3 「いえ、偶然にしては出来すぎかしら」

3 「もしかしたら、王都にキミと同じ世界から来た人でもいるのかしらね」

3 「そうであつたなら・・・そうね何かのキツカケにはなるかもしれないわね」

320 319 318 317 316 315 314 313 312 311 310 309 308 307 306 305 304 303 302 301

3 「いつかは、そんな・・・素敵・・・な日が来るのかも」

3 「――で、どうなの？そのわたがしというのは美味しいの？」

3 「もし一緒の物ならとても甘い・・・そっかー・・・ん、私も王都にお出かけしたいな」

3 「最近全然王都に行けていないから、買い物すらも出来ていないのよ」

3 「そうね・・・最後に行ったのはもう2か月前くらいかしら」

3 「日用品のなんかは魔術配送屋さんが持ってきてくれるの」

3 「注文して5分以内には届くから、便利なのよ」

3 「ほら、キミの世界にも似たような物が・・・あるんじゃないかしら？」

3 「今までの話を聞いていると、文明が発達しているようだったから」

3 「そこまで早くないのね・・・なるほど」

3 「でも、そうね。そんな便利な物に頼り切ってずっとこの森に引きこもっていてもいけない気がするし」

3 「近々お出かけでもしてみようかしら」

3 「あー、そんな時にエスコートしてくれる方がいるととても助かるのだけれど」

3 「どこかにそんな心優しいお方は居ないかしらー？」

3 「たとえば、私のことをよくわかっていて」

3 「頻繁にお会いする方で」

3 「私のお膝を独占しているような・・・ふふっ」

3 「ね、どうかしら。キミと知り合って一度も一緒にお出かけしたこともないし」

3 「ふふっ、ありがと。その日を楽しみにしてるわね」

3 「さて、そろそろ」

340 339 338 337 336 335 334 333 332 331 330 329 328 327 326 325 324 323 322 321

左耳かき終わり

3 「反対側のお耳もお掃除しましょうか」

3 「はい、反対側にコロコロ」

身体向きを変える

7 「じゃあこつちもお掃除しちゃうわね」

右耳かき開始

7 「こつちのお耳も相変わらずねーとても綺麗」

7 「たまにはもう少しやりがいのあるお耳にしてくれたっていいのよ」

7 「恥ずかしいって、気持ちにはわかるけども」

7 「一応、ここは耳かき屋さんだから」

7 「お耳がいつも綺麗じゃ私のやることが大半無くなってしまうもの」

7 「それに、キミのお耳お掃除するの、これでも結構好きなのよ？」

7 「かきかきーって始めると目を細めて気持ちよさそうにしてる横顔とか」

7 「しばらくお掃除しているとウトウトしちゃうところとか」

7 「とてもかわいらしくて、ついつい甘やかしたくなっちゃうから」

7 「たぶん、私に弟がいたらこんな感じだったのかなーなんて考えたり」

7 「ふふつ、男らしくないって事じゃないのよ？」

7 「キミはちゃんと男の子よ？カッコイイ。自信もって甘えていいんだからね？」

7 「ふふつ、でも私はそうね・・・凄く男らしいって人もカッコイイと思うけれど」

7 「何より、こんな私なんか頼ってくれるような、何かを求めてくれるような」

360 359 358 357 356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 343 342 341

「そんな人が好きかな」

「過少表現なんて言ってくださる方もいるけど」

「癒しの魔法は成長途中だし、なにより物質転移なんか簡単な物しかできないから」

「さっき話した魔術配送屋さんなんて、凄い人は山3つ分先のお宅にも瞬間配送出来るそうよ？」

「え？私の癒し魔法が一番好き？」

「そ、そうなの？もう、お口が上手ね」

「嬉しいから何かしてあげようかしら？」

「ありがと、本当にそう思ってくれているのはよくわかるから、ただそんなに真剣に言われると」

「いくらお姉さんでもその、照れちゃうのよ」

「だから、ね。うん」

「・・・」

「困っちゃったわね、どうしよう」

「それじゃあ・・・」

「（耳元良き吹きかけ）ふー・・・」

「ふふつ、どう」

「普段こんなお耳に良き吹きかけるなんてしないのよ？」

「私を照れさせてた罰になったかしら、それとも・・・褒美？」

「もつとして欲しいなら・・・してあげてもいいよ？」

「なんて、冗談」

「（独り言）これ以上は、隠せる自信無いもの・・・」

380 379 378 377 376 375 374 373 372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361

「何でもないの」

「そうだ、最近ね。美味しい茶葉が手に入ったから後でお茶でもいいかが？」

「それで、さつき嬉しいこと言ってくれたお礼にしちゃう」

「今ならお茶菓子も付けちゃうわよ？」

「それも、森で食べたような簡易的なものではなくて」

「私お手製の少し凝ったやつ」

「あのね、可愛いくて美味しいお菓子が出来たの」

「本当は誰かにも見てほしかったのだけれど、中々機会がなくて」

「凄いのよ？新種のお砂糖でね？まさかのマンドラゴラの涙から採取されたお砂糖らしいの」

「程よく甘くて、口当たり完璧。それに甘さが口に残らなくてスツと溶けて」

「今までのお砂糖では実現不可能と言われたそのまま焼けるっていうのが特徴なの」

「普通焼いたら溶けちゃうじゃない？違うの。これは単体で焼けて、他の粉と混ぜて焼くと溶ける不思議な・・・」

「あ・・・ごめんさい。ついいっぱい話してしまつて」

「普段お菓子作りの事とかでお話出来る人がいなかったから・・・」

「嫌じゃなかったかしら・・・」

「そう？良かった・・・それじゃもう少し落ち着いて話すわね」

「それで、そのお砂糖を使って作ったものがあつて、とてもおいしく出来たら是非キミにも感想が聞きたいの」

「自分では美味しいと思つていても、他の人にはそうじゃないかもしれないじゃない？」

100 399 398 397 396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381

7 「それに、なにより」

7 「キミに食べてほしくて、その。頑張ってた所もあるから」

7 「いつも頑張ってる、ヘトヘトな時もあるはずなのに、それでもこのお店に通ってくれて」

7 「キミは充実してるからこれぐらいヘッチャラだなんて言うけど」

7 「なんとなくだけど、森で一人な私を心配して来てくれるのもあるのかなって」

7 「もしそうだったら、何か私もしてあげたいなって」

7 「でも、私には立派な事は出来ないから」

7 「数少ない得意なお菓子作りで喜んでもらえたらなって」

7 「・・・本人に伝えると恥ずかしいね、想像以上に」

7 「そういうことなので、是非後で食べてみてください」

7 「あ、もし美味しくなかったりしたときはちゃんと行ってね？」

7 「その時はもつとキミの好きな味に仕上げられるように頑張るから」

7 「いいの、これは私が好きでやってることなんだから」

7 「それにやっぱり、キミにとってここに来て癒しの魔法や耳かき、マッサージを受けるのが幸せなら」

7 「私にとつての幸せは、キミの笑顔が見られることだから」

7 「こうやってずっと、私のお膝の上を無防備な顔でコロコロしてしてる。そんなキミを見られれば」

7 「それで、じゆうぶん十分だから」

右耳かき終わり

7 「はい、こつちのお耳も終わり」

7 「さて、ここでお姉さんから提案があります」

120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101

7 「先ほど言っていたお菓子なのですが、普通に座って食べるか」

7 「（囁き）この膝枕のまま・・・私に食べさせてもらうか、どっちがいいですか？」

7 「ふふつ、固まっちゃった。固まってちゃ動けないわよねー・・・困ったわねー」

7 「え？力が入らない？」

7 「ふふつ、どうしてかしら。もしかしたら悪いお姉さんが癒しの魔法で脱力でも付与してるのかもしれない

いわね」

7 「そうだとしたら大変よ？キミは私のお膝から離れることが出来なくなっちゃうから」

7 「ふふつ、さて、冗談はさておき。いいの。私がしたいことだから、そのままお膝の上でコロンとしてて」

7 「キミを甘やかすのクセになつてきてるのかもしれないわね、私」

7 「右手にお菓子、左手に紅茶」

両手にそれぞれが呼び出される

7 「こんな時のために紅茶はすでに作っておいたの」

7 「特製の茶葉だから、作り置きしても風味が落ちない」

7 「さすがに紅茶は膝枕では飲めないだろうからこっちに置いておくわね」

7 「さてさて、本命のお菓子さんの登場です」

かわいらしい袋から一口サイズのクッキーのような物を取り出す

7 「見て、一口サイズの薄ピンクな色味、可愛いでしょ」

7 「あ、顔の向きはそのままでもいいわよ？ちゃんと食べさせてあげるから」

7 「少し身体を曲げるね」

7 「はい、あーんして？」

140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121

7 「あーん」

7 「どう、かな・・・」

7 「え？味がわからない？あら、そんなに味薄くしてたかしら」

7 「ん？どうしたの？」

7 「ーあ・・・ごめんさい、胸が頭に乗ってたのね」

7 「お顔をお膝と胸でサンドイッチしてたなんて・・・苦しくなかった？」

7 「なるほど、緊張して味がわからなかったのね・・・」

7 「食感は・・・柔らかかったってそんなわけないでしょ？それサクサクしているものなんだから」

7 「もお、お胸の感想とごちやごちやになってるじゃない、落ち着いて？」

7 「それで、改めてどうかしら、甘さ加減とか」

7 「美味しかった？良かったあ・・・」

7 「もしよかったらまだあるから是非食べてね」

7 「もしご希望なら、また食べさせてあげるわよ？」

7 「味がわからなくなつて、食感が柔らかくなるかもだけど・・・ふふっ」

7 「はい、私もそろそろ恥ずかしいのでそんな事は出来ません。ごめんね、座ってゆっくり食べましょうか」

膝枕から起き上がり隣に座る

2 「まだまだこれだけあるから好きに食べていいからね」

2 「それと、紅茶もどうぞ。口の中スツキリすると思うから」

玄関で扉をノックする音

2 「あら？どなたか来たみたい・・・ちよつとここで待っててね」

160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141

部屋の扉を開け閉めし玄関に向かう

扉越しに遠くからとどころどろ声が聞こえる

「あら、おひさしーです」

「え、どうしてそれーはいーわかりましー」

「でも、もう少しだけーはい、すみまー」

「大丈夫ーいつかはー覚悟してー」

「いえ、ありがーはい、それではー」

部屋に戻ってくる

「・・・」

「ーえとね、良いお知らせが入ったの」

「仙人さんが今いらしてくれてね」

「その・・・キミが元の世界に帰る方法があるそうなの」

「ビックリよね、突然・・・見つかって」

「それでね、その方法なんだけどそれがまた急で、明日の朝に、賢者様が精霊様たちと協力してゲートを
作るそうなの」

「本当はそのゲートで賢者様だけが帰る予定だったらしいんだけど、仙人さんがもう一人いるってキミの
話をしたら一緒に帰るかって話になったそうで」

「そのゲートを使えば元の世界に帰れるって。やっぱり賢者様もキミと同じ世界から来ていたのね」

「ちなみに、わたしがしとかこの耳かき棒とかキミが見たことがる道具を普及していたのも賢者様だったみ
たいよ？」

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161

2 「帰れる目途^{めど}がたつたから、娯楽や便利な道具を出来るだけ伝えていたみたい」

2 「仕事の引継ぎとかは仙人さんがしてくれるみたいだから安心して言ってた」

2 「（独り言）きつともう、向き合わなければいけないってことなのね。キミも・・・私も」

2 「なんだか、解決したらあつという間ね・・・うん」

2 「王都への買い物も行けなくなっちゃったね」

2 「別の日につて、そうなんだけどね。どうしても明日じゃないといけないみたい」

2 「それに、キミはもうだいぶここに定着しているから・・・帰れるうちに帰らなきゃ」

2 「ーねえ、変なこと言ってもいい？」

2 「私のわがまま」

2 「今日・・・泊っていかない？」

シーン 4

※このシーンは全体的にウィスパ―気味な感じで。

夜、添い寝している所

3 「ふふつ、まさかキミとこんな風になるだなんて想像もしてなかった」

3 「お布団、そっちは足りてる？身体冷やすといけないから寒かったら言ってね？」

3 「なんか・・・凄くドキドキする」

3 「誰かと一緒に添い寝だなんてしたことなかったから・・・」

3 「あ、キミつてば少し遠慮してるでしょ。身体離そうとしてる」

3 「もし嫌じゃなかったら・・・もつとこっちにきて？」

500 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181

3 「私の体温が、心臓の鼓動が伝わるまで・・・もつときて？」

3 「ふふつ、なんかおかしい。普段甘えさせてあげるって言ってるのに」

3 「こういう時は私から甘えちゃうだなんて」

3 「たまには、こういうのも悪くないかもしれないわね」

3 「甘える側をすることによって、その心を知る・・・みたいな」

3 「キミは誰かと添い寝したことはある？」

3 「私が初めてだと・・・初めて同士で嬉しいなーなんて」

3 「ふふつ、初めてなんだ。そっか」

3 「なんだろう、凄く恥ずかしくて照れて・・・なのに、凄く幸せなの」

3 「本当はね、仙人さんから話を聞いたとき、寂しかった」

3 「キミとのこの時間は、なんだかんだで続くと思っていたから」

3 「だからね、意地悪して、なんでもなかったよ？ただの世間話だったよって・・・悪いことしようとも思
つちやつた」

3 「けど、それじゃダメなんだよね」

3 「キミにはキミの帰る場所がある」

3 「会うべき家族がいる」

3 「・・・慣れない世界で必死に生活しようとしたキミを知ってる」

3 「そんな姿を知っているから」

3 「きつと、帰るべき場所に帰れるのなら、それは帰らなきゃいけないんだって」

3 「キミの事を本当に想うのであれば、それが正解なんだって」

520 519 518 517 516 515 514 513 512 511 510 509 508 507 506 505 504 503 502 501

3 「そう思っ

3 「気づいたら伝えてた」

3 「だから、今日のこの添い寝は今までの感謝とお別れ会を兼ねて」

3 「そして、これからのキミに少しでも私の癒しが届きますようにっていう願い」

3 「あとは・・・単純にキミともう少しお話ししたいという女子会かな？」

3 「ふふつ、でもこういうのって楽しそうじゃない？」

3 「夜にお布団の中でお話するの、なんだかイケナイ事をしているようで、お姉さんワクワクしちゃうな」

3 「ホント、こんなに悪い子だったかしら私。どこかの異世界人さんに影響されちゃったのかも」

3 「悪い子といえば、仙人さんも悪い人。そうかなーとは思ってたけどまさか本当に賢者様がキミと同じ世

3 界から来ているだなんて、教えてくれても良かったのに」

3 「もつと早くに知っていればキミの為に他にも何か出来たかもしれないのに」

3 「もー、ほつぺた膨らませちゃおうかしら。ぷくー」

3 「ふふつ、ちよつとはしやぎすぎかしら」

3 「いつもは最低限お店の人としての自覚をもってお話してるから」

3 「ここまで自分を出してお話できるのも珍しいかも」

3 「自分を曝け出しちゃうついでに、こんな事もしちゃおっかな」

キミの腕に抱きつく

3 「ぎゅーっ、えへへ。お姉さんらしくないことしちゃった」

3 「ごめんね、今日だけは許して」

3 「キミにはね、知っていてほしいの」

540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523 522 521

3 「いつものお姉さんな私も、キミの腕に抱きついちゃう甘えん坊な私も」
3 「私のぬくもりも、そして柔らかさも」
3 「忘れないように、これからも思い出せるように」
3 「明日の朝、笑顔でさよならって送り出したいから」
3 「だから・・・」
3 「（囁き）私を・・・知ってほしい」
3 「きっとこれはキミを困らせちゃうことだってわかっているけど」
3 「これからあるべきはずだった私達の為にも」
3 「今は、このワガママ許されますか？」
3 「・・・ふつ、本当に困った顔してる」
3 「私から言い出したことだけど、ダメだよ、そんな顔しちゃ」
3 「・・・笑顔、見せてほしいな」
3 「ほら、にーって」
3 「・・・えー、それ本当に笑顔？」
3 「あははっ、やっぱり今日の私ははしゃいじゃってるみたいね」
3 「ふぁー、ごめんなさい。珍しくはしゃいじゃって疲れちゃったみたい」
3 「そろそろ・・・寝ましょうか」
3 「ね、このまま腕を抱かせてもらっていてもいいかしら」
3 「ありがと。それじゃあ・・・おやすみなさい」

【寝息 5分】

シーン5

お店の玄関にて

1 「忘れ物はない？さすがに今回は忘れ物があるとお届けできないから」

1 「ふふつ、大丈夫そうね。前みたいにお財布忘れてっちゃうと大変だよ？」

1 「もし今回忘れてっちゃったらお店の運営資金にしちゃうから」

1 「――お家に仙人さんがお迎えに来てくださるんですって。そしたら後はついていけば大丈夫なはずよ」

1 「まさかキミにとって仙人さんとの初対面がお帰りの日になるだなんてね、これも精霊様のお導きなのかしら？」

1 「――準備は・・・出来た？」

1 「どうしたの？その顔。いつものお店から出ていくお顔と違うよー？」

1 「私との時間、楽しかった？」

1 「私はね・・・幸せだった」

1 「楽しいだなんて言葉じゃ足りないくらいに」

1 「まるで宝石のように輝いてた」

1 「きつとこれからもこの宝石は私の胸の中で輝き続けるから」

1 「私はこの輝きに見合う様に、これからも頑張る」

1 「そしてキミの事を、この森から応援してるから」

1 「・・・そうだ、最後にとっておきを教えてあげる」

580 579 578 577 576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561

1 「どうしても疲れて辛い時は探してみて」

1 「癒しの魔法使いを」

1 「きつとキミの世界にもいるから」

1 「癒しの魔法使いには目印があるの」

1 「それはね・・・優しい笑顔」

1 「癒しの基本はね、与える側が笑顔でいることなの」

1 「キミの元いた世界でもそれは同じ」

1 「辛いとき、寂しい時に。ふと周りを見たら」

1 「もしかすると、癒しの魔法使いが手を差し伸べてくれているかもしれない」

1 「だから優しい笑顔を、見逃さないで」

1 「きつとそこに気づけば」

1 「もう・・・ここには戻ってこないから」

1 「（焦って）あ、えと、最後のは忘れて」

1 「さ、そろそろ行かないと。仙人さんを待たせちゃう」

耳元に駆け寄り

7 「（笑顔で囁く）さよなら・・・いつてらっしゃい」

終わり